

# 農林水産省 (事務系)

「安易に人気のあるところには行かない方がいいので」と提唱するのは鈴木憲和さん。いま国家公務員の人気

が落ちている中で、いまこそ能力のある人と一緒に仕事したいと意気込む。

農林水産省に決めた理由は、官庁訪問で君は続かないよという強烈な「ダメ出し」をもらったから。こちらの想定



鈴木 憲和さん  
(消費・安全高総務課)  
I種試験区分II法律



川邊 隼之介さん  
(大臣官房秘書課)  
採用担当者より

## 古い省庁ではない!

農林水産省は食の安全と安定供給に重点を置きながら、農林水産業の可塑性の拡大を考えています。環境や医療、観光など、これまで省が関わりの少なかった分野連携をしながら「新しい方向」へ、成長産業として切りかかわるのが特徴です。

「農林水産省は古くは、山漁村の生産者であるからこそ、一人の農家のことも直接話し合ったりするなど、現場と密接に」

「私なら〜ができる」とチャレンジ精神を持った方に来て欲しいです。

## 霞が関に収まるな

最大規模のファシションイベント、東京カールスコレクションでは佐々木希さんに、食べることの大切さを語ってもらった。「今までなら代理店に丸投げしていたところも自分らでやりましたね」と語るように、佐々木希さんへの出演交渉も鈴木さんが行った。

真面目でコツコツと重要な役割を担っている。真面目さは重要だが、農林水産省は第一次産業のマネージメントをする役所。組織人としてではなく一人の経営者として生きていけるか、そこが問われていると感じる。つまらないと言われることもくじけず、自力で何かを起せる人が必要。

また、日本では米が余っている。もし世界的なジャボニカ米の市場が出来れば、自然と日本産の米が「高級ブランド品」になっていく。中国だけでなく南アジアへの市場開拓を狙うべきと意気込む。

# 農林水産省 (技術系)

「仕事とは頭で考えるだけでなく、多くの人を巻き込んで行うものです」と語る高岸克行さん。現在の仕事は農業規制に関する国際ルールの策定だ。人

から工学系研究科に進学、修士課程修了後に入省した。国家公務員を志望した動機は、家の再生医療の研究中、個人

では対処不能な国の制度上の問題点とぶつかり、国家レベルで働くことの「大きさ」を本も把握して、制度を変えていく必要がある。



高岸 克行さん  
(消費・安全高農産安全管理課)  
I種試験区分IV理工

そのために、日常における情報収集は欠かせない。普段からメールを通じて世界中にいる関係者とやり取りをする。「新しいルールを作るときにはまずドラフトを作るのですが、各国の政府と意見交換をしないと完成させることはできません。そして、定期的に国際会議への出席もある。いままでに訪れた都市はパリ、ブタペスト、北京など。会議の期間に入ると非常に忙しくなるので1週間を通して休みがないことも。「仕事の半分以上の過程に英語が必須となっていますね」と苦笑い。

技術系で入省しても、行政官として求められる基本的な資質は同じ。さらに専門的な知見を持つ分、政策立案のエキスパートとしての役割を感じる。大学で学んだことは基礎にしか過ぎないので、入省後も勉強を続けなければいけない。「省内の勉強会のおかげで、国際会議では研修なども行われています。一人で勉強しなければ……という訳ではないです」

## 化学系から政策立案のプロへ

食品安全、特に農業に関して日本は先進国の中で遅れている。若い人が既存の制度を変える必要があると意気込む。